

地域の学習支援教室における外国ルーツの子どもの支援の現状と課題

—切れ目のない支援を目指して—

唐木澤みどり（学習院大学）

石平晃子（豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク）

1. 実践の場と目標

NPO が運営する無料の学習支援教室（以下「E 勉強会」）は、国籍や家庭の事情に関わらず地域の子どもが通える学びの場として、週1回地域の集会室を利用して学習支援を行っている。対象は小中高校生で、各回の参加者は、子どもが25人程度、支援者が15人程度である。E 勉強会は、外国人人口の比率が13%（2026年1月現在）と都内でも高い地域で活動している。2012年に立ち上げた当初は日本人の子どもが中心だったが、徐々に外国ルーツの子どもが増加してきた。参加者として登録されている人数（内外国ルーツの人数）は、2025年12月現在、小学生17人（16人）、中学生16人（10人）、高校生以上10人（9人）の計43人（35人）となっており、外国にルーツのある子どもは全体の約8割である。ネパールルーツが最も多く、次いで中国ルーツが多い。対日歴や日本語能力は様々である。日本語でおしゃべりができるようになっても、教科学習に苦戦する子どもが多い。

E 勉強会では、家庭環境や国籍に関わらず、個々の子どもに応じた切れ目のない支援を目指している。だが、外国ルーツの子どもの増加により、日本語学習支援などそれまでとは異なる支援の必要性が生じ、外国ルーツの子どもならではの課題も見えてきた。例えば、学習に参加するための日本語能力の育成には長期間にわたる支援が必要であるが、学校での日本語指導が十分に受けられない子どもも少なくない。小学生から高校生まで通える学びの場として、切れ目のない支援を行っていくには何が必要であるか。本発表では、これまで行ってきた様々な支援実践を振り返り、地域の学習支援教室が行う外国ルーツの子どもの支援の現状と切れ目のない支援を行うための課題を明らかにすることを目標とする。

2. 実践の内容

E 勉強会がこれまで行ってきた外国ルーツの子どものための支援実践としては、NPO 内外のネットワークを活かした支援と E 勉強会における子どもに応じた支援がある。以下にこの2つの学習支援実践についてその内容と課題を検討する。

2.1. NPO 内外のネットワークを活かした支援

NPO が地域の子ども支援のために行っている様々な活動による連携として、子ども食堂などの別の活動に参加する子どもが、勉強に困っていたら E 勉強会を紹介して参加してもらうことや、E 勉強会で家庭の事情による困難があれば支援先を紹介することなどが挙げられる。このようなネットワークが、支援が必要な子どもの存在に気づき、支援に結びつける仕組みとなっている。外国ルーツの子どもの増加に伴い、外国人支援団体等とのネットワークも広がり、支援の仕組みからこぼれがちな外国ルーツの家庭の支援も可能となっている。課題としては、地域の日本語学習支援の場が少ない、日本語ができない親が多いため家庭への支援が必要な場合が少なくないこと等が挙げられる。

2.2. E 勉強会における子どもに応じた支援のための実践

まず、発表者の一人が担うコーディネーターの役割がある。参加者・支援者の情報・出欠管理、マッチング、教材準備、学習記録（振り返りシート）の管理、振り返りミーティング・MLによる支援者間の情報共有、親との連絡等を担っている。特に子どもと支援者、支援者間の関係づくり・居場所づくりを大事にしている。

次に、子どもの学習支援等の課題を共有する支援者同士の連携がある。毎回終了後に振り返りミーティングを行い、子どもの様子や課題を共有し検討している。また、毎回子どもとボランティアが学習の記録として振り返りシートを書くことになっており、各自が学習を振り返る機会となるとともに、次の活動への準備や引継ぎがスムーズに行われることを目指している。

最後に、各支援者の得意分野を活かした支援の多様化が挙げられる。日本語教育専攻の支援者による日本語学習支援や、日本語以外の言語対応が可能な支援者による子どもの母語や理解可能な言語による支援、得意な教科や学校教員等の経験のある支援者による教科学習支援などである。小中高校生の時に支援を受けていた大学生が、支援者として支援をしてくれることもある。

E 勉強会で行われている支援者による具体的な日本語学習支援として、日本語による読み書きの力の育成を目指した活動を取り上げる。読み書きを含め、長期的な支援が必要な学習言語能力の育成が大きな課題であるが、通常行われる学校の課題や試験勉強のサポートだけではその育成は難しい。そこで、独自の活動として「読み聞かせ」と「作文活動」を行っている。

2025年度から始めた小学生への「読み聞かせ」は、担当する支援者によってもその方法は多少異なるが、日本語で読むことが苦手な子どもたちが「読む」ことに親しみ、関心を持つことを目標としている。主に低中学年の子供たちは、得意な「話す・聞く」力を活用しながら、「読む」力を伸ばすことが求められる（文部科学省 2025）。コミュニケーションをとりながら、挿絵に注目させたり、あらすじを再生させたり、感想を聞くなどのやりとりを行っている。

「作文活動」は2023年度より毎年取り入れており、子どもの日本語支援において重要な「表現支援」（文部科学省 2007）を中心に行っている。おおまかなテーマとワークシートを用意し、子どもと支援者が対話しながら、子ども自身が書きたいことを決め、内容を考えながら書けることを目標としている。

3. 結果と考察

E 勉強会を運営する NPO の持つネットワークにより支援が必要な子どもを支援に結びつける仕組みは、外国ルーツの子どもへの支援としても効果的である。また、多様な支援者による連携や個々の子どもに応じた支援実践は、子どもの成長・発達に応じて変化していくことで長期的な切れ目のない支援が可能となることが示唆される。課題として、①子どものことばの力に応じた日本語学習支援の広がり、③ボランティアの継続性、日本語学習支援への理解等が挙げられる。

参考文献

文部科学省（2007）「日本語支援の考え方とその方法」『学校教育における JSL カリキュラム（中学校編）』.p.14 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_ics_files/afieldfile/2015/10/06/1235804_002.pdf

文部科学省（2025）「文化的言語的に多様な背景を持つ外国人児童生徒等のためのことばの発達と習得のものさし（ことばの力のものさし）実践ガイド」 p.15

https://www.mext.go.jp/content/20250620-mxt_kyokoku-000042836_02.pdf